

2016.8

(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

8号

第38巻
No.325



カラスビシャク *Pinellia ternata* Breit. (サトイモ科 *Araceae*)

生薬

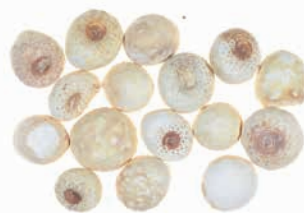
ハンゲ（半夏）7～9月、まだ花茎が残っている時期に塊茎を掘り取り砂と水を入れた容器中で攪拌し、ひげ根と外皮を取り除き、水洗後陽乾する。

成分

えぐ味成分：homogentisic acid, 3,4-dihydroxy-benzaldehyde、アルカロイド：ephedrine、アミノ酸、多糖類、ステロール類、シュウ酸カルシウム等。

効能

よく湿を燥し、痰を化し、胃を和し、逆を降ろし、脾胃の水湿を除く去痰、鎮吐薬として小半夏湯、半夏瀉心湯、二陳湯、半夏厚朴湯、小柴胡湯などの漢方処方に配合される。



生薬 カラスビシャク

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



カラスビシャク。あまり聞きなれない植物名ですが、日本全国、中国、朝鮮などの日の当たる畑地など、どこにでも生育する雑草です。稲作の伝来とともに日本に渡来した史前帰化植物と言われているが、繁殖力が強く、全国に分布し、古来から色々な名前がつけられていることから、在来種ではないかとも考えられています。『本草和名』(918)には「和名、保壽久美」とあり、塊根から伸びる細い花茎は25~30cmと長く、その先に付ける仏焰苞は5~6cmで中部以下は巻いて筒状となる形態から持ち手の細い、水などを汲む物の意味で名づけられたとも推測されます。現在の和名のカラスビシャクも緑や暗紫色の仏焰苞の形から烏と柄杓を連想したものと考えられています。他に「スズメノヒシャク」(周防)、「キツネノヒシャク」(江州)なども同様の発想から名付けられたのではないかと。英名の crow-dipper はカラスのヒシャクで和名の直訳です。

普通、種子繁殖する植物は他の繁殖法をあまり持ちません。カラスビシャクは普通の種子繁殖と他に球状の地下茎から出る葉柄の地下の中央部にできる球芽と、3小葉からなる葉身の中央部にできる球芽から幼苗が育ちます。葉は2本出ることもあり、途中で枯れたり除草されるとまた新しく葉を出し、球芽の数が増えます。また、球状の地下茎は大きくなると数個に分球し、増えることもできます。このようにありとあらゆる繁殖法を駆使する身近な畑の雑草であったため付けられた名前もあります。取り除いてもすぐに生えてくる雑草は百姓泣かせであり「ヒャクショウナカセ」の名前になりました。また、除草の際に直径1~2cmになる球状の地下茎を掘り起こして貯めておくと、それを集荷する人が買い上げ、ちょっとした収入になったことから、「ヘソクリ」の別名も生まれました。別説では生薬の雀みがヘソのように見えるところから付いたとも言われ、「ヘソビ」(岐阜)、「ヘソベ」(静岡)、「ヘバス」(山形)などの地方名もあります。

生薬名のハンゲは中国名の半夏の音読みです。『礼記』(紀元前2世紀頃)の月令の仲夏の月(五月)に「小暑至る。鵲初めて鳴き、反舌声無し。是の月や、…鹿角落ち、蟬始めて鳴き、半夏生じ、木槿榮く。」とあり、『本草綱目』(1590)には「蓋し夏の半に相当するという意味だ。」と記され、夏の半ばに生えるところから名付けられたと言っています。古くから使われる重要な生薬で、『神農本草経』や『名医別録』(502-536)には用い方の記載があります。『新修本草』(659)には「平沢に生ずるものを羊眼半夏と名け、円く白くして勝れたもの」と品質が良いが小さい半夏や、「江南には大きい径一寸ほどのものがあつて」と大きい半夏が紹介されています。

日本に於いても多くの本草書に登場しますが、『本草綱目啓蒙』(1803)には詳しい植物の説明や葉が竹葉のように細い物や仏焰苞の色が外は緑色、内は紫黒色など変異が大きいことが記されています。小葉が細く、長くなる品種は現在のシカハンゲ(*f. angustata*)や仏焰苞の内側が暗紫色になるムラサキハンゲ(*f. atropurpurea*)に通じるところがあります。また、「一種おほ半夏あり。高さ一尺余。葉、花、根ともに大なり。方書及び附方に齊州半夏、大半夏といふ是なり。薬家に売ものは皆和産なり。」とも記され、日本固有種のオオハンゲ(*P. tripartita*)についての記載もあります。

(村上守一 記)